年齢別人口分布からみた兵庫県の地域特性

栗原　由利子

キーワード:年齢別人口，人口ピラミッド，類型区分，兵庫県，都市と農村

1. はじめに

本研究の目的は，人口数，人口構成，人口変動の地域的分布を明らかにし，その分布と変動を，各地域の特性との関連において考察することである。主として，年齢別人口構成の地域的分布に着目し，戦後の復興期から，高度経済成長期，石油ショック，バブル期，そしてバブル崩壊期という戦後50年間にわたる変動を分析する。人口構成とは，性別（男女別），年齢別など，いくつかの観点から人口を分けて，構成をみることである。人口変動とは，人口の増減であって，ある地域における人口増減は，出生・死亡の差による自然的増減と，転入・転出の差による社会的増減によってもたらされる。本研究の基礎データとしたのは，総務庁統計局が発行する各年次の国勢調査報告である。

対象地域としたのは，兵庫県および県内市区町村である。兵庫県を選んだのは，私の出身地であるから，他の地域に比べてファミリアで，より多くの情報を蓄積しており，地域特性を考察しやすいことが第一の理由である。また，本県は瀬戸内海沿岸から中央の山地部，日本海沿岸まで広がり，多様な地域が含まれていることから，日本の縮図として，本研究に好適であることも大きな理由である。

本研究の方法は，まず，年齢別人口構成について，全国的な動向と兵庫県における特性を明らかにする。次に，兵庫県および県内市区町（村）を地域単位として，1950（昭和25）年，1960（昭和35）年，1970（昭和45）年，1980（昭和55）年，1990（平成2）年の10年間隔，5か年分の男女別，年齢別人口の基礎データを収集整理する。これらをもとに，人口ピラミッドの系列を作成して，類型区分する。さらに，都市と農村，施設立地と交通網などの地域特性と関連させて，年齢別人口の構成と変動の過程を明らかにする。

2. 年齢別人口分布の動向

1995（平成7）年10月1日現在の兵庫県の人口は540万2千人，全国総人口（1億2,557万人）に占める割合は4.3%で，その規模は全国47都道府県中第8位である。また，人口密度は644人／km^2で，全国の人口密度（337人／km^2）の2倍近くとなっており，全国第8位である。

兵庫県の人口を男女別にみると，男子が261万2千人，女子が279万人で女子が多く，人口性比（女子100人に対する男子の数）は93.6で全国の人口性比（96.2）を下回る。これを年齢階級別にみると，全国では50歳未満のすべての年齢階級で男子が女子を上回って人口性比が100を超えているのに対し，兵庫県は15歳から49歳の各年齢階級で女子が多く，人口性比が100を下回り，とくに20～24歳が低い。

年齢3区分人口は，0～14歳の年少人口が16.3%，15～64歳の生産年齢人口が69.5%，65歳以上の老年人口が14.1%で，全国平均（それぞれ15.9%，69.4%，14.5%）とほぼ同じ年齢構成となっている。しかし，年々，年少人口が縮小し，老年人口が拡大している。

兵庫県の人口は，戦後初めて行われた1947（昭和22）年臨時調査以来48年ぶりに減少した。これは1995（平成7）年1月17日に起こった阪神・淡路大震災の影響による，他府県への人口流出によるものと推測され，とくに神戸，阪神地域では，震災による影響が甚大であったため，人口の減少が著しい。また，全国的に現れている，少子・高齢化に

よる構造変化，農村地域での人口減少の進行，地域間での格差の拡大などについてみても，顕著に現れている。

3. 兵庫県の年齢別人口分布

男女，年齢別人口の構造の特徴を視覚的にとらえるものとして「人口ピラミッド」がある。わが国の場合，戦前から 1950（昭和 25）年ごろまでは「富士山型」をしていた。しかし，1947（昭和 22）年～1949（昭和 24）年の第 1 次ベビーブーム直後に出生数が急減したため，1955（昭和 30）年の人口ピラミッドは「つぼ型」に近くなった。その後，昭和 30 年代の終わりごろから第 2 次ベビーブームの昭和 40 年代半ばにかけて出生数が徐々に増加したため，人口ピラミッドのすそが再び広がり，「ほし型」に変化した。しかし，1973（昭和 48）年をピークに出生数が再び減少しているため，1980（昭和 55）年以降の人口ピラミッドは，年齢別にみた人口分布の膨らみが 2 か所ある「ひょうたん型」へと変化している。なお，諸外国の人口ピラミッドをみると，アメリカ合衆国とドイツは「つぼ型」，イギリスとフランスは人口停滞型の「つりがね型」，インドは「富士山型」，中国は「ほし型」となっている。

年齢別人口の分布から兵庫県を対象に，都市と農村の地域特性をさぐるため，戦後 50 年にわたる変動を主として人口ピラミッドから分析した。その方法は次のとおりである。

(1) 国勢調査のデータを収集整理して，1950（昭和 25）年から 1990（平成 2）年の 10 年おきの人口ピラミッドを作成し，類型区分した。
(2) 1950（昭和 25）年については，町村合併が行われる前であったので，1960（昭和 35）年以降と区別し，1960（昭和 35）年から 4 年次分の推移をタイプ別に分類した。
(3) 人口ピラミッドの類型区分は「富士山型」「つりがね型」「つぼ型」「ほし型」「ひょうたん型」の 5 種類で行った。例外的な型はさらに細かく区分し，分類した。

年齢別人口の分析と考察の結果，次の 5 点が明らかになった。

(1) 1950（昭和 25）年は，大部分の市町村で「富士山型」，神戸市を中心とする都市部で「ほし型」となっていた。「ほし型」には戦争による死亡や軍人の海外流出，または児童の疎開による年少人口の減少が顕著に現れている。
(2) 1960（昭和 35）年は，兵庫県全土で「つぼ型」になった。これは第 1 次ベビーブームの影響による。農村部においては，「ヨット型」という年少人口が極端に多い例外的な型も現れた。
(3) 1970（昭和 45）年は，都市部で「ほし型」，農村部で「ひょうたん型」となった。都市部では，第 2 次ベビーブームの兆しがみえ，農村部では，生産年齢人口の流出に伴う人口減少，出生率の低下が現れた。
(4) 1980（昭和 55）年は，都市部，農村部ともに出生率の低下が現れた。また，20～24 歳の年齢階級の人口流出が顕著に現れはじめた。これは，大学や専門学校および就職による都市への人口移動である。
(5) 1990（平成 2）年は，都市周辺部の人口が増加し，神戸市の中心部，尼崎市など大都市地域および農村部の人口が減少した。また，農村部の高齢化が一層進行した。

なお，1960（昭和 35）年から 4 年次分の人口ピラミッドの推移を類型区分すると，表 1 のように A～K の 11 タイプに分類される。兵庫県各市町のタイプ別分類を図 1 に示す。また，都市と農村の人口変動の違いをより明らかにするために，兵庫県全体，兵庫県南部の都市部（尼崎市），兵庫県北部の農村部（竹野町）の人口ピラミッドの推移を図 2 に示す。

表1. 人口ピラミッドの推移の類型区分(1960(昭和35)年～1990(平成2)年)

タイプ	1960年	1970年	1980年	1990年	代表的な市区町
A	つぼ	― ほし	― ひょうたん	― ひょうたん	神戸市, 姫路市, 尼崎市など
B	つぼ	― ほし	― つぼ	― ひょうたん	灘区, 兵庫区, 長田区など
C	つぼ	― ほし	― ひょうたん	― つぼ	芦屋市
D	つぼ	― つりがね	― ひょうたん	― ひょうたん	洲本市, 豊岡市, 龍野市など
E	つぼ	― つりがね	― ひょうたん	― ひょうたん	西脇市, 中町, 揖保川町など
F	つぼ	― つぼ	― ひょうたん	― ひょうたん	三田市, 加西市, 夢前町など
G	つぼ	― ひょうたん	― つりがね	― ひょうたん	吉川町, 大河内町など
H	つぼ	― ひょうたん	― つりがね	― つりがね	社町
I	つぼ	― ひょうたん	― ひょうたん	― ひょうたん	日高町, 出石町, 篠山町など
J	ヨット	― ひょうたん	― ひょうたん	― ひょうたん	上月町, 竹野町, 津名町など
K	ヨット	― ひょうたん	― ほし	― ひょうたん	南光町, 青垣町, 五色町

出所:筆者作成

4. 兵庫県の地域特性

人口ピラミッドを作成し，類型区分することで，年齢別人口分布から兵庫県の地域特性を検証した。中には，ある年齢階級の男性または女性が多いという例外的なものが含まれていた。また，農村地域では20～24歳の年齢階級が少ないという事実も明らかになった。これは，学校や施設の立地，地域の産業，交通網に深く関係している。

(1) 学校…1990（平成2）年の夢前町では，15～18歳の男性人口が女性の約2倍もある。全寮制の男子高が開設されたためである。また，1990（平成2）年の福崎町では，18～20歳の女性人口が男性の約2倍となっている。寮のある短期大学が存在していたためである。

(2) 産業…1950（昭和25）年，1960（昭和35）年の西脇市周辺および猪名川町周辺で，15～24歳の年齢階級の女性人口の割合がかなり高かった。これは，当時，前者では播州織が，後者では毛織物工業が発達していたためである。

(3) 観光地…市町別観光客総入込数では，神戸市が圧倒的に多く，宝塚市，西宮市，姫路市といった兵庫県南部に集中しているが，過去20年の推移をみれば，兵庫県北部の増加が著しい。一方，人口減少，高齢化は急速に進んでいる。

(4) 交通網…東西間の交通網は充実しているのに比べ，南北間の交通網はあまり発達していなかった。しかし，近年では，交通網の整備を進め，新たな観光開発を進めている。また，都市と農村を結ぶ架け橋として今後の発展が期待される。

農山村地域では若年人口が極端に減少している。移動しやすい年齢階級が都市部および周辺の衛星都市へ移動し，移動の困難な老年者が残り，老年人口は増加の一途をたどっている。農村地域だけでなく，出生率の減少から都市部においても老年人口の増加は現実となっている。もはや，少子・高齢化は農村部だけの問題ではなくなっている。このような状況下にあって，これからの兵庫県には快適な生活空間が求められている。年齢別人口分布から地域の特性を考え，各地域に適した環境の整備が望まれるところである。

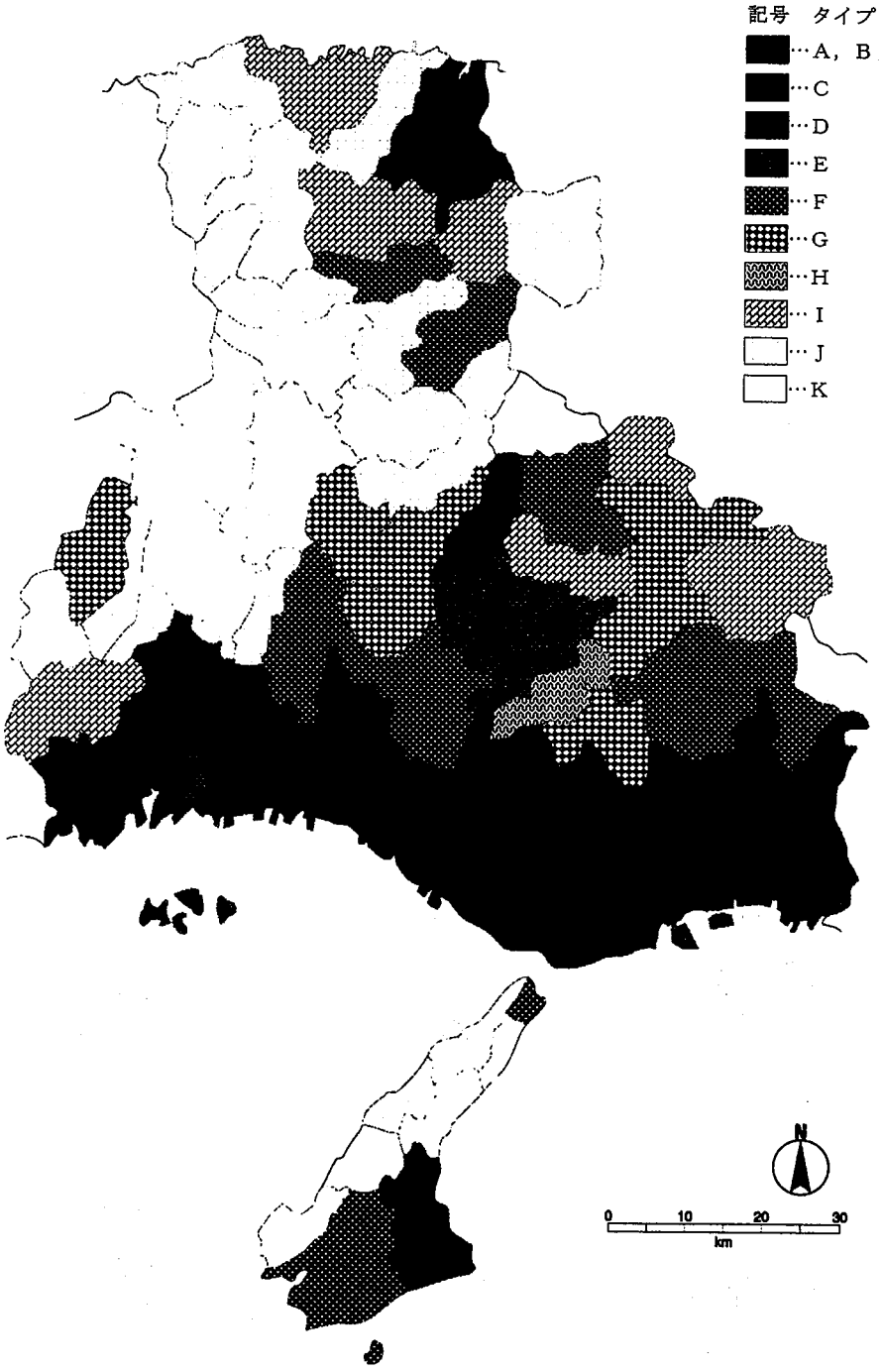

図1．人口ピラミッドの推移のタイプ別分類（1960（昭和35）年～1990（平成2）年）
出所：筆者作成

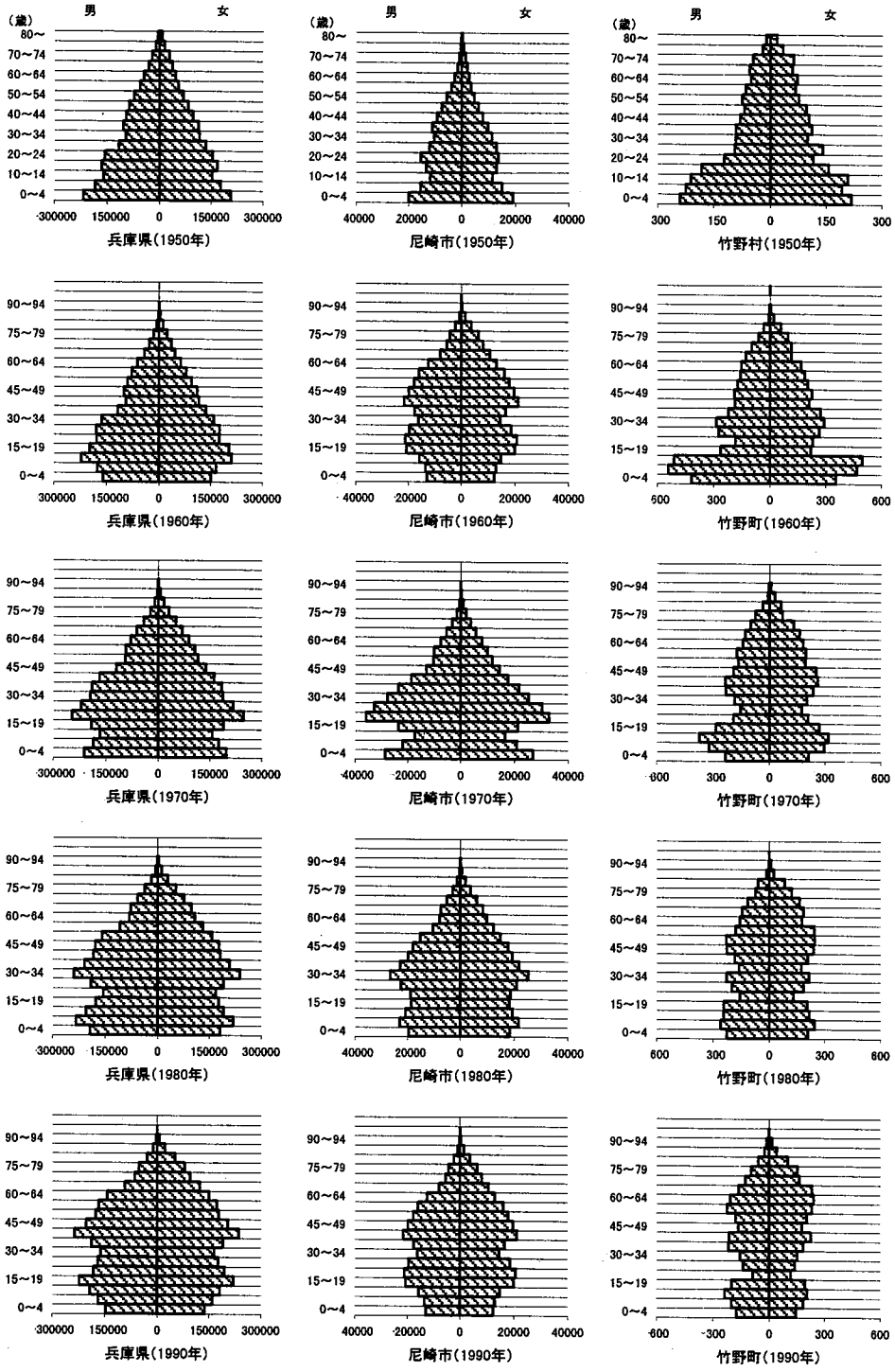

図2. 人口ピラミッドの推移（出所：各年国勢調査報告より作成）

5. おわりに

本研究を通して兵庫県の人口における特性が明らかになった。人口数においては，農村部の減少，都市周辺部の増加がはっきりしている。兵庫県南部への人口の集中により，南北の地域格差が広がっている。人口構成においては，兵庫県北部や淡路で年少人口が少なく，老年人口が圧倒的に多いことがあげられる。まさに超・高齢化社会といえよう。しかし，この問題は兵庫県北部および淡路に限ったことではなく，老年人口の割合の上昇は兵庫県全土に広がりつつある。人口変動において，終戦後は，海外からの引揚げとそれに伴うベビーブームにより，出生数が増加した。その後，出生数が減少するものの，戦後のベビーブーム期に生まれた女子が出産力の高い年齢層に達し，1970（昭和 45）年から 1975（昭和 50）年にかけて，第 2 次ベビーブームとなる。しかし，1975（昭和 50）年以降，出生数の低下が顕著に現れ，現在では少子化の一途をたどっている。この少子化は農村部に限ったことではなく，兵庫県全体で起こっている。

また，人口移動について，農村から都市への移動が主になっているが，その中でもとくに 20～24 歳の年齢階級の移動が大きい。最近では，中心都市のまわりを取り囲むようにして人口が増加している。兵庫県では，神戸市や姫路市周辺の市町で人口が増加している。とくに生産年齢人口の増加が目立つ。

これらは，東西の交通網の発達が進んでいるのに対し，南北の交通網の発達が遅れていることが一つの原因となっている。農村部の人口減少・過疎化や少子・高齢化，都市部の過密化などの地域問題に対する方策として，南北間の交通網の整備，それと同時に南北の地域間交流を充実させることが望まれる。

これからの時代，住みやすい生活環境を築き上げるために，一人一人が地域の活動に積極的に取り組んでいかなくてはならない。兵庫県全土を活性化させるためには，まずは，各地域の特性を把握し，次に，その地域特性に合ったまちづくりを考えていく必要がある。そのためには，情報化社会と言われる現代，地域間の交流を密に行うことが，地域の活性化に役立つものと考えられる。

参考文献

神戸新聞出版センター（1983）:『兵庫県大百科事典下巻』1574p.

総理府統計局（1953）:『昭和 25 年国勢調査報告　第 7 巻その 28 兵庫県』357p.

総理府統計局（1963）:『昭和 35 年国勢調査報告　第 4 巻その 28 兵庫県』529p.

総理府統計局（1972）:『昭和 45 年国勢調査報告　第 3 巻その 28 兵庫県』749p.

総理府統計局（1982）:『昭和 55 年国勢調査報告　第 2 巻その 2　28 兵庫県』357p.

総務庁統計局（1992）:『平成 2 年国勢調査報告　第 2 巻その 2　28 兵庫県』635p.

総務庁統計局（1992）:『平成 2 年国勢調査解説シリーズ No.2 都道府県の人口　その 28 兵庫県の人口』151p.

総務庁統計局（1997）:『平成 7 年国勢調査解説シリーズ No.2 都道府県の人口　その 28 兵庫県の人口』118p.

総務庁統計局（2000）:『平成 7 年国勢調査最終報告書　日本の人口（解説編）』635p.

兵庫県商工部新観光課（1981）:『昭和 55 年度　観光客動態調査報告書』61p.

兵庫県商工部新観光課（1986）:『昭和 60 年度　観光客動態調査報告書』57p.

兵庫県商工部新産業観光課（1991）:『平成 2 年度　観光客動態調査報告書』83p.

兵庫県商工部商業観光課（1996）:『平成 7 年度　観光客動態調査報告書』83p.

兵庫県土木部道路建設課（1999）:『こころ豊かな兵庫の道づくり』28p.